

未来ノート

-202Xの君へ-

バレーボール

くろごあい
黒後愛

1千回のパス練

高校で初の頂点

プレーは笑顔で

理想のエースへ

いまも守る 父の教え

全日本女子の黒後愛(20)は、幼いころからバレーボールにふれてきた。父洋さん(53)は宇都宮大のバレー部監督。母裕子さん(52)はママさんバレーの経験者。5歳上の姉彩乃さん(25)は一足先に中学の選手として活躍していた。遊び場は体育館。早くち

ームに入りたといせがむ愛に、洋さんは「子ども時代に色々やっておくことが大事」。あえて、様々なことに挑戦させた。「ピアノは今も帰省すれば弾くし、水泳も真剣に通っていた」と洋さん。育った宇都宮市は冬季競技も盛んな地域。スキーやスケートにも連れて

いってもらった。

愛の願いがかなったのが小学3年の時。「サンダーズ」というチームに同級生3人と入った。基礎を徹底的に仕込まれた。たとえばパス練習。アンダーパスだ

けで1千回、オーバーパスでも1千回。アンダーパスでは懐にボールを入れると、腕の動きが窮屈になる。腕を上下動させずに

「足でボールを運ぶ」ことをイメージした。単調な練習を来る日も来る日も、繰り返した。

「は仲間にもボールを返すところから始まる」と、パス練習を大事にした。父の教えは今も、守っている。

試合になると抜群の集中力で球を追い、時にはスパイクも決めた。「21-0でセットを取ることも。実力差があっても簡単ではない。すごかった」。父はそう懐かしむ。

おじの昭さん(58)がバレー部の顧問を務める市立若松原中学に進むと、背も伸びて、バレーにのめり込んでいく。部員が一時は5人にまで減ったが、愛は「何

でも強いスパイクを決めるが、小学生の時は背の高さは平均くらい。ブロックもせず、球を拾うことが上手な選手だった。洋さんは「守れない選手は使えないよ」と言った。愛は「バレー

もしくなくていいから」と小学校の時にバレーをやってきた生徒を強引に勧誘して、県大会で優勝。全国選抜に選ばれるなど、その名が知られる存在になっていった。



①世界選手権でスパイクを放つ黒後愛(2018年10月)
②小学生時代の黒後愛(左)は姉彩乃さんの影響でバレーボールに親しんだ(提供)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。